

涅槃經にとって大乘とはなにか

河村孝照

一、問題の所在

大乘仏教の源流をさかのばれば、その主要教理の大部分は部派仏教の中に、なかんずく大衆部の主張する教理におおくみることができると論じたのは、前田慧雲の『大乘仏教史論』においてであった。例せば、「過未無体説」は大衆部の根本教理であると同時に大乘經典の底を流れる根本原理であること、また、「心性本淨説」は大衆部の根本教理であると同時に大乘仏教の説く真如縁起説の原理であること等々である。これらはやがて、大乘仏教は大衆部から起ったということが、学界の定説のごとくなってきたことは否めない事実である。それでは根本の教理において、大乘と小乗とどう区別するのかということになると、これは容易ならぬ問題である。そこで、教理の上から大乘小乗の区分を考察することもさりながら、これは教団の上からの大乘小乗の区別を検討しなければ、真の大乘教団というものも明らかになしえず、教理の考察はこの上に立って成り立つものと考えられたのが、平川彰博士の「初期大乘仏教」の意であった。そこでは前田慧雲博士の大乘の大衆部源流説は、大乘教団としては著るしく根拠が薄弱となった訳である。

涅槃經にとって大乘とはなにか（河村）

涅槃經にとつて大乘とはなにか(河村)

さて、大乘の涅槃經、ことには曇無讖訳の『大般涅槃經』のごときは、經典にもられた諸種の教理は、あるいは有部所説に同じるものあり、あるいは成実所説に同じるものあり、またその他、いかなる部派の所説かつまびらかならざるもの等々、まことに多彩であつて、決して一筋縄でくくれるものではない。例えば前掲のように、大乘仏教の根幹の教理思想とされる「心性本淨説」のごときも、涅槃經は清淨説に批判的態度をとり、「善男子よ、諸仏菩薩は終に心に淨性及び不淨性有り」と定説せず、淨、不淨性は心に住処無きが故に」(徳王品、卷二十五)と述べているがごとき、これを有部の婆沙論にみれば、婆沙論卷二七において分別論者の心性本淨説に対して批判し、煩惱があるときに有貪瞋痴心といい、煩惱がなくなつたときを無貪瞋痴心といい、とくに心の本性がどうかという取りあげ方をしていないところと教理上まことに似通つてゐることが知られるのである。また大乘小乗の重要教義の一つとして十二因縁説がある。大乘はこれを二世一重に解釈して説き、小乗はこれを三世兩重に解釈して説くというのが大小乗の區別とされている。いま涅槃經の十二因縁説をうかがうと、「過去の煩惱を名づけて無明と爲し、過去の業は則ち名づけて行と爲す。現在世の中、初始めて胎を受くるを、是を名づけて識と爲す。入胎して五分、四根の未だ具せざるを、名づけて名色と爲す。四根を具足して未だ触と名づけざる時、是を六入と名づく。未だ苦楽を別たざる、是を名づけて触と爲す。一愛に染習する、是を名づけて受と爲す。五欲に習近する、是を名づけて愛と爲す。内外に貪り求むる、是を取と爲す。内外の事の爲に身口意業を起す。是を名づけて有と爲す。現在世の識を未來の生と名づけ、現在の名色、六入、触、受を未來の老病死と名づくるなり」(卷二十七、師子吼品)と説いてゐるがごときは、これは小乗にいう三世兩重の十二因縁説にはかならない。これを成実論にみると、この十二因縁説も亦た三世兩重を説いており、成実はまったく有部宗の所説に同じである。ここで涅槃經の所説と多少相違するといへば、小乗有部が現存の

愛、取、有を未來の生老死の因とすに對して、未來の生を現在の識の果とし、未來の老病死を現在の名色ないし觸、受の果としているところであるが、これが三世兩重にわたって説かれていることにはかわりはない。大乘の因果説である二世一重の十二因縁は説かれるところではない訳である。このほかにもとりあげればまだまだ存在するが、このように涅槃經にもられた教理内容や、また經典自身もっている素材の出所などを確かめると、その多くに阿含、ニカーヤ所説のものや、小乗アビダルマにおいて説く教理の存することを指摘することができるのである。それでは涅槃經は、何に故をもつて自ら大乘と稱しているのか、この点に關する課題は、今日まで必ずしもあきらかに浮きぼりにされているとはいえない。それはすでに涅槃經をして、とくに大乘の白眉とされる法華經とならんで大乘經典の重要なものの一として、その立場からこの涅槃經は検討されてきたからである。この研究にあつては、むしろそれは反對に、しかもきわめて素朴に、涅槃經にとつて大乘とはなにかと問ひかけ、涅槃經は何をもつての故に大乘と稱しているのか、この点について涅槃經自らが語るところを明らかにしてみようというのが、この論文のねらいである。

一、大乘仏典としての涅槃經の組織

大乘を標榜し大乘を唱道する仏典としての涅槃經の組み立ては、涅槃經の伝訳の事情ときわめてよく合致する。まず前十卷、すなわち、大衆所問品までを前段とし、それ以後を後段とするのがこれまで採用された涅槃經の内容上の区分法であつたが、この研究にあつてもこの区分法はあてはまつた。後段においてさらにこれを現病品から徳王品までと、師子吼品、迦葉品のグループと、最後に橋陳如品との三つに区分すると理解し易かつた。すなわちこれらを通して述べると、まず序品から大衆所問品までは、大乘といへば涅槃經のことであり、この涅槃經の説く所を信奉する

涅槃經にとつて大乘とはなにか（河村）

涅槃經に就て大乘とはなにか（河村）

ことよつて大乘の菩薩道が完成されると説くところである。このところにあつては、涅槃經における大乘の主義主張が説かれるが、それでは大乘を学する具体的な修行に至つては、必ずしもまとまつて説かれてゐるとはいえない。つまり涅槃經が大乘大涅槃の大施をかかげて大乘を唱道してやまないところであつて、涅槃經の主張の存するところであつた。つぎに現病品から徳王品に至る間は、涅槃經の説く大乘の具体的な修行徳目、ならびにその所得の功徳を説くところで、これは前段、すなわち前十巻の部分の、具体的な補足説明とみることができた。これが五行十徳にまとめられており、即ち、涅槃經の説く大乘の徳目とみることができるとも根本課題は、それは仏性の開頭であつて、それがつぎの師子吼品に説かれ、この仏性開頭の当然の帰結として、大乘が主張してやまない一切皆成を成立せしめる一闡提の成仏が、つぎの迦葉品において説かれていくのである。かくして涅槃經の大乘が確立してそこに外教徒の謬見を正すことができ、大乘大涅槃の教団に入ることができるのである。そこで本論文において、涅槃經に就て大乘とは何かと問うとき、その中心課題は仏性開頭にあるとしても、涅槃經は何をもつて大乘と稱しているかということになると、とりあげるところは主として序品より徳王品に至る涅槃經における説相ということになるのである。

三、前段に説かれた涅槃經における大乘

涅槃の会座は序品（以下の品名は理解の都合上、慧嚴再治本による）に五十二類といわれる。これらの会座の衆の中で、阿羅漢は、「衆生を利益し安樂にし、大乘第一空行を成就し、如来の方便密教を顯発せんと欲するが爲に」仏所に至り、菩薩は「その心皆な悉く大乘を敬重し、大乘に安住し、大乘を深解し、大乘を愛樂し、大乘を守護し」、

また「衆生を利益し安樂にし、大乘第一空行を成就し、如来の方便密教を顕発せんが為に」仏所に至ったのである。優婆塞は亦た無上大乗を樂聞せんと欲し、淨戒を持して大乘を渴仰し守護し、優婆夷は大乘を渴仰し守護し、大乘經典を受けることを願ひ、毘耶離城の諸衆は、常に大乘經典を樂聞し、聞き己って亦たよく人の為に広説せんと欲し、大臣・長者は大乘を敬重して正法を謗する者を摧く護法長者であり、毘舍離王及び後宮等は大乘を敬重し大乘を深樂し、諸王の夫人は正法の中に安住し、諸の天女は大乘を愛樂して大乘を聞き、人の為に広説し、大乘を渴仰し、大乘を守護し、大乘第一空行を成就し、如来の方便密教を顕發せんが為に仏所に至り、諸の象王は大乘を敬重し大乘を愛樂し、帝釈天及び三十三天は大乘を深樂し愛護し、魔王波旬たちは大乘を愛樂し大乘を守護し、正法を守り大乘を守る咒を説き、東方の意樂美音世界の仏たちは、もっぱら無上大乗の声を聞き、諸花中の一一の師子座上に王あつて大乘の法をもつて衆生を教化し、あるいは衆生の大乗經典を書持し誦誦し、如説修行してこれを流布する等、このような諸類が會座に集まつたと涅槃經は述べている。これらはとりもなおさず、涅槃の座の説法は大乘經典が説かれることを示し、この説法はまた正法であり、つまりこの涅槃經そのものが大乘經典であり、正法であるという大前提のもとに經典が編纂されていることを知るのである。會衆の中には大乘を渴仰し求めることが記されていないものもある。例えば竜王、鬼神王、鳥王、自在天王等がそれであるが、これは經典製作者の省略によるものであり、五十二類の會衆ごとごとくが、大乘を渴仰し、大乘の義を實踐し、大乘を守り、大乘を広めることを願つて仏所に來至した者ばかりである訳で、従つて以下に説かれる教説がただちに大乘であることをあらわそうとしている。

純陀品において文殊菩薩と純陀は問答をする。その中に、「正法を護らんと欲せば、如来は諸行に同じ、諸行に同じからずと説くこと勿れ。もし正見する者は、如来は定んで無為と説くべし。——護法の菩薩も亦た是の如くなるべ

涅槃經にとって大乘とはなにか(河村)

し。寧ろ身命を捨つとも、如来は有為に同じと説かざれ¹と説かれる。これは正法護持がこの涅槃經の一つの狙いであることを示し、正法、すなわち正見は、「如来は定んでこれ無為」と説くところであることを示しており、これが涅槃經大乘の教説であることがわかる。従つてこれにつづいて、「云何んが護法なる。謂ゆる説きて如来は無為に同じと言ふなり²」と説示している。如来無為をさらに經は「如来常住法、不變異法、無為法」と説き、この純陀の言を仏は、「汝は已に微妙の大智を成就し、善く甚深の大乗經典に入れり³」と讃めている。これによつて涅槃經の大乘は如来常住法であることがわかるのである。それでは何故に仏は滅を示すかというについては、「衆生に示同して方便涅槃す⁴」といひ、法華經壽量品と全同である。

哀歎品において涅槃經は、大乘の法蔵は秘密蔵であり、秘密蔵は法身、般若、解脱の三法の伊字の三点に安住することであることを説示する。それは、「汝等今者、出家を得と雖も、此の大乘に於て貪着を生ぜず。……その心猶お未だ大乘の淨法に染まるを得ず。……未だ曾て大乘の法食を乞わず。……汝諸の比丘、今当に眞実に汝等に教勸すべし。……我れ今当に一切衆生および我が子、四部の衆をして、悉く皆な秘密蔵の中に安住せしむべし。我も亦復、当に是の中に安住して涅槃に入るべし。何等をか名けて秘密蔵と爲す。猶し伊字の三点の如し。……解脱の法も亦涅槃に非ず、如来身も亦た涅槃に非ず、摩訶般若も亦た涅槃に非ず。三法各々異なるも亦た涅槃に非ず。我れ今是の如きの三法に安住して、衆生の物の故に涅槃に入ると名づく⁵」と説かれるところであつて、ここでは涅槃經のいう大乘法の内容が示されている訳である。哀歎品はまた三修法を説いて、涅槃經の正しい認識を主張する。衆生は想顛倒、心顛倒、見顛倒をもつて常楽我淨の四顛倒をおこす。そこで仏は無常、苦、無我等を修せしめたが、出世間法は常楽我淨であり、「我とは即ち是れ仏の義、常とは是れ法身の義、楽とは是れ涅槃の義、淨とは是れ法の義⁶」といひ、この

「無上正法を、悉く摩訶迦葉に付嘱す」という。この無上正法とは常樂我淨説であり、このことよって涅槃大乘の教説は常樂我淨説が打ち出されていることがわかるのである。

長寿品において長寿業の因縁、すなわち仏陀の永遠性を説くにあたって、大乘の法を以て菩薩に付して法を久住ならしめよと宣説している。そしてこれら菩薩に対して如来の長寿業の因縁として、一子のごとく衆生を護念し、大慈大悲大喜大捨を生じ、五戒十善を守り、四弘誓願を修する等をあげている。そして持戒比丘者の守るべき道として、威儀を具足し、正法を護持し、正法を破壊する者を見て驅遣し、訶責し、徴治することを説き、かりにも壞法の者を見て訶責し驅遣しとりあげることがなかつたならば、この人は仏法中の怨であるとさえいつている。そこで涅槃經は、「無上の正法を以て諸王、大臣、宰相、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷に付嘱す。この国王および四部の衆は、学人を勵まして戒定慧の三学を得しむべし。もし破戒して正法を毀る者があつたら、国王、大臣、四部の衆はこれを対治すべし」というのである。このように、長寿品においてとりあげられる正法すなわち大乘を守るところの法は、愛一子に住し、四無量心、四弘誓願、持戒の諸徳が説かれている訳であつて、さらに特徴としてあげられることは壞法者に対する涅槃經の態度である。それは壞法者に対しては、国王、大臣の力をもつてこれを驅遣、訶責すら義務づけていることであり、そのために法を国王、宰相、大臣に付嘱しているのである。それではその大乘の法について經の述べるところをみれば、涅槃經は、「無上甘露の法味を獲得せしむ。所謂る如来の常樂我淨なり」というのである。ここにあつて涅槃經の大乘法は、常樂我淨がつかぬかたれていることがわかる。

金剛身品に至つて、正法護持の諸相が説かれている。いま諸相を列挙すれば、

一、正法を護持する者は、五戒を受けず、威儀を修せず、刀劍、弓箭、鉞槩を持って持戒清淨の比丘を守護すべし。

涅槃經にとつて大乘とはなにか(河村)

涅槃經に於て大乘とはなにか(河村)

一、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷たるもの、まさに勤加して正法を護持すべし。護法の果報は廣大無量なり。護法の優婆塞等、刀杖を執りて是の如きの持法比丘を擁護すべし。もし五戒を受持し具する者あるも、名けて大乘の人と為すことを得ざるなり。五戒を受けざるも、為に正法を護れば、乃ち大乘と名づく。正法を護る者は、まさに刀劍器仗を執持して說法者に侍すべし。⁽¹⁶⁾

一、もし諸の國王、大臣、長者、優婆塞等が護法の為の故に刀杖を持すと雖も、我れ説きて是れ等を名けて持戒と為す。——迦葉、護法の者と言うは、正見を具し、よく広く大乘經典を宣説するを謂う。⁽¹⁶⁾

これらによつて、護法のためには刀劍をも持することを説き、かつまた國王大臣のこれに干与することをあげている。これは前品と同趣意である。

經は四相品において持戒清淨の比丘について具体的に示すと法ころがある。像法中に似像持律の比丘がいて正法を誹謗し、如来は肉食をゆるしたもうというが、これは如来所制の戒律を破壊するものとして經は断肉の制を宣説する。⁽¹⁷⁾

また破戒者として、經律論の禁制や、四重、十三僧殘、二不定法、三十捨墮、九十一墮、四悔過法、衆多學法、七滅諍等を破ることをあげている。また半字と聲明論をもつて大乘をあらわし、半字とは九部經をいい、聲明論とは所謂の方等大乘經典をさすといひ、幼稚の者には半字九部經を説き、慧力そなわつて大乘を説く。「諸の弟子の為に半字九部經を説き已つて、次に為に毗伽羅論を演説す。所謂る如来常存不變なり」としてこの大乘は、いわゆる如来常住であるといつてゐるのである。⁽¹⁸⁾

四依品においてまた説くところは、「是の大涅槃微妙の經典は消伏すべからず。甚奇甚特なり。もし聞者あつて聞き已つて信受し、能く如来の是れ常住法なるを信ぜば、是の如きの人は、甚だ希有と為す」と説いて、⁽¹⁹⁾ これまた大涅

槃の經は如来の常住法を説くものであるといい、これが大乘無上の正法であるといふのである。

この涅槃經の流布する時について經は、「如来の滅後四十年の中、是の大乗典大涅槃經は、閻浮提に於て広行流布し、是を過ぎて已後地に没せば、却後久近にして復た當に還つて出づべき。仏の言わく、善男子、もし我が正法の余八十年、前四十年、是の經復た當に閻浮提に於て大法雨を雨すべし。——是の如きの經典は正法滅するの時、正戒毀るの時、非法増長の時、如法の衆生無きの時、——乃ちよく惡世の中に於て是の法を謗せず、受持、誦誦し、經卷を書写し、よく聽受し、通利し、擁護堅持し、是の經を供養し、尊重し礼拜せしめん。是の如く具足してその義味を尽さん。所謂る如来常住不変、畢竟安樂なりと。衆生に悉く仏性あるを説き、是の如き無上の正法を建立して受持し擁護せん」と説かれるところである。また邪正品には、仏滅後七百年の後に魔破旬が仏伝、戒、教説に關するおおくの魔説を主張する。これは如来の所説ではなく、仏伝について言えば八相成道のごとき仏伝の教数は魔説であり、仏説はこれらほみな仏が衆生に同じて示現したものにすぎないということであり、戒についていえば一切の不淨物もみな仏の大慈の故に蓄えることをゆるすといふのは魔説であり、ゆるさずとするのは仏説であるといふ、教説にあつては、如来は無常變異するとは魔説であり、如来は常住にして變異なしといふのが仏説であるといふ、一切衆生みな仏性ありと宣説する經典に隨順するのが仏説であり、これに隨順しないものは魔の眷屬である等の所説をかかげてい⁽²¹⁾る。これらによれば、仏滅後七百年ごろに唱道されたもので、それはこれまで説かれた經典、これを九部經と指示しており、それら經典の外に説かれた經典が如来所説のもので、その戒において不淨物を善えず、教説においては如来常住説と悉く有仏性説であり、この經典を受持誦誦通利書写供養することがすめられている。

この經典は四依品には「正法もて國を治すべし」の語があり、また正法を護持する菩薩は惡比丘を擯治するために⁽²²⁾涅槃經にとつて大乘とはなにか(河村)

涅槃經にとって大乘とはなにか（河村）

方便して八種不淨物とも受善してよいとまでいっている。前者はさきに国王大臣にこの經を付囑すると述べたことにも、この大乘經典は国家体制と著しく近接した關係を予想せしめ、後者も破戒の惡比丘を驅遣するための護法のあり方が著しく方便の道が示されている点で、先の持戒者を護るために刀劍を持することをゆるしていることともにきわめて特殊である。

月喩品にあつては涅槃經は「大乘方等經」として説かれるところがとおく、この大乘方等經は一闍提の不成の問題と對比して説かれている。これは一闍提が破戒者であるとともに、涅槃經における大乘誹謗者であることがわかる。むしろ涅槃經大乘の不信誹謗者としてはじめて登場したといえる。

四、後段における大乘

涅槃經における後段は前段のアビダルマ的解釈と補足であることは前述した通りである。涅槃經は前段の教説をさらに經典独自の立場、つまり九部經の後に説かれた大乘大涅槃の獨特の教説となれば、五行十徳において説かれるところである。五行とは聖行、梵行、天行、嬰兒行、病行であり、十徳は徳王品において説かれるところで、闍提成仏への道、神通、大慈悲、精進、涅槃への道、断惑と涅槃、解脱と仏性等をはじめとする諸徳が説かれている。涅槃經の大乘としての教説はむしろこの五行十徳の中にあるはずで、この五行十徳のおもむくところが、つぎの師子吼品における仏性遍在の正説、そのつぎの迦葉品における一闍提の成仏説である。

五、まとめ

前段における經の説相は涅槃經の大乘のまず施じるしであつて、その中心命題は如来の常住説と常楽我淨の四徳説

と仏性説であったといえる。涅槃經の如来常住説は法華經の延長線上にあり、四徳説は勝鬘經の所説と同じである。仏性説は如来蔵經典のグループに入る。正法護持における国家との関連は金光明經をうかがわせ、戒において断肉の制文は楞伽經のそれと態度を一にする。涅槃經はこのような大乘を唱道してやまないものであるが、それとともに大乘不信者を設定して一闍提と名づけたことは、大乘仏教史上初出であり、かつまたこれをも成仏の道を開いた点において一切皆成をつらぬいたといえる。しかもその具体的な道といえば、五行十徳として示しているところであり、これが涅槃經大乘の特色として、前段における施じると表裏して明らかにされねばならぬと思う。従来涅槃經のすぐれている点をあげるときは、前段における如来常住、常楽我浄と、後段における仏性遍在、一闍提成仏等があげられるが、これは一經の施じると結論とであって、經の中間に説かれた五行十徳説は施じると帰結を結ぶ実践体系である。これは涅槃經をして大乘たらしめるものの重要な役割を荷うものであると考えられ、涅槃經が多くの小乗の素材を拉し来りながらも、小乗と大乘とのけじめをつける宗教的内容と考えるのである。

〔註〕(蔵經の指示は再治本とする)

- (1) 大正蔵經卷十二、六一三 c
- (2) 〃 六一三 c
- (3) 〃 六一四 b
- (4) 〃 六一四 c
- (5) 〃 六一六 a b
- (6) 〃 六一七 a
- (7) 〃 六一七 a
- (8) 〃 六一九 a

涅槃經にとって大乘とはなにか(河村)

涅槃經にとって大乘とはなにか（河村）

大正藏經卷十二、六二〇a b

六二〇c、三箇処にわたり説く。

（10） 六二〇c

（11） 六二〇c

（12） 六二一a

（13） 六二二a

（14） 六二三b

（15） 六二四a

（16） 六二四a

（17） 六二六a b

（18） 六三一a

（19） 六三八b

（20） 六三八b | 六三九b、六六三a 参照。

（21） 六四四a | 六四六a

（22） 六四一a

（32） 六四一a